

## 会 議 録

会議名称	第四次西東京市地域福祉活動計画 第3回策定委員会
日 時	平成29年12月12日(火) 午後7時～9時
会 場	田無総合福祉センター2F 視聴覚室
出席者	(策定委員) 小林委員・中村委員・小松委員・熊田委員・坂口委員・多田委員・ 海老澤委員・三輪委員・鈴木委員・伊東委員 (事務局) 1. 池田・丸木・鶴野・小平・浜名・妻屋・小口・齊藤・本間 (コンサルタント) 佐藤・小林 <株式会社 ジャパンインターナショナル総合研究所>
欠席者	横山委員、伊田委員、藤島委員
配付資料	資料1 「第2回策定委員会会議録」「保健、医療、福祉関係者懇談会」「地区懇談会」 資料2 第四次西東京市地域福祉活動計画策定のための市民アンケート 資料3 「市民アンケート調査」集計結果報告書(案) 資料4 「我が事・丸ごと地域共生社会の実現」における社会福祉協議会に期待すること
次 第	1. 第2回(平成29年10月24日開催)会議録の確認について 2. 第四次西東京市地域福祉活動計画策定のための「市民アンケート調査」集計結果報告(平成29年9月19日～10月24日) 3. 懇談会の実施について (1) 保健、医療、福祉関係者懇談会の実施概要(案)について(社協独自開催) (2) 地区懇談会 実施概要について(市・社協合同開催) 4. 「我が事・丸ごと地域共生社会の実現に向けた取り組みにおける社会福祉協議会に期待すること」 5. 次回以降の日程、会場 平成30年 2月26日(月) 19時～21時 田無総合福祉センター (2F) 視聴覚室
会議の内容 及び 主な発言	※次ページの通り

## 会議の内容及び主な発言

### 1. 開会

- ・池田事務局長より挨拶
- ・資料確認
- ・副委員長より挨拶

### 2. 議事

#### (1) 第2回（平成 29 年 10 月 24 日開催）会議録の確認について

- ・質疑なし。

修正等の意見の受付期限（12 月 15 日(金)まで）内に特に意見等なく、確定稿とした。

#### (2) 第四次西東京市地域福祉活動計画策定のための〔市民アンケート調査〕集計結果報告

- ・事務局、コンサルタントより資料 2、3 に沿って説明。

##### 【質疑・意見等】

##### （副委員長）

- ・質問も含めて意見交換をしたい。最後の自由記述に意見をたくさん書いていただいているので、ここに参考になるヒントが隠されているのではないかと思う。

##### （委員長）

- ・西東京市社協は地域づくりに一生懸命取り組んでいるが、結果として「居場所がほしい」とか「地域のつながりがうすい」といった意向が強く出てきていることをどう考えるかがポイントになる。今後、分析の方法も確認していくことになるが、西東京市社協として既に取り組んでいるが、十分ではないこと、また、取り組んでいないことが提案されていた場合にそれを検討していく必要があると思う。もし、事務局やコンサルが分析したなかで、この点について気づくことがあれば教えていただきたい。

##### （事務局）

- ・確かに取り組んでいるが、市民にはなかなか届いていないということがアンケートの結果から感じている。市とも各種のネットワークの統合、整理など、事業のすり合わせをしているが、そこを整理することで市民にとっても分かりやすくなるので、今回の計画にも盛り込んでいきたいと思う。

##### （委員長）

- ・今回のアンケートは、対象が社協の事を知っている方、また社協の関係の方だということがポイントである。地域で関わっている方の中で「つながり」や「居場所」を求める声が出てきているので、今後の懇談会等でも意見を拾っていけるとよいと思った。

##### （委員）

- ・「自由記述」で「◎」をつけた部分について、今後社協の活動に生かせるような意見、踏まえるべき意見につけたとのことだったが、その根拠を伺いたい。

##### （事務局）

- ・社協で行っている事業を踏まえ、あくまでこれから取り組まなければいけないと想定したものに「◎」をつけた。委員の皆さんからも挙げていただいて、「◎」をつけるべきだというものがあれば意見をいただきたい。

(副委員長)

- 世代間交流が殆ど「◎」というのはいい意味で気になった。

(委員)

- 問 12 の居住する地域でどのような問題があると思うかという問いについて、災害のところのポイントが高いことが気になった。だれにとっても災害に対する取り組みは大切なことで、日々のつながりがあって災害が発生した際に安心できるという一連の流れがあり、社協だけでなく私たち自身も災害に対して向き合わなければならない。
- 今回のアンケートは社協に関わっている人たちのアンケートで、社協とつながっていない人の地域のカもあるので、その方たちとのつながりを次の計画にどう生かしていくかが課題なのではないか。

(副委員長)

- 社協にご縁のない方々のニーズをどう拾うかはこれからの課題だと思う。

(委員)

- 民生委員として「地域」のことについて言うと、社協が色々な居場所や交流の場を作っていたでいてよくやってくれていると思っていた。居場所を作ってほしいと言う声はまだあるということでPRが足りないのではないかと思う。私の仕事についてももっとPRしないとイケないと思った。

(副委員長)

- ご指摘があったように、地域に近い方々だからこそ分かるPR不足を感じていることが見受けられた。

(委員)

- 私も居場所づくりで『チャオ!』をやって5年目になる。まだ駆け出しで、社協が携わっている取り組みなどがようやく分かりかけてきた段階であり、それを広げていく段階にはなっていないという結果がこのアンケート結果から分かった。居場所を浸透させるために、認知不足、PR不足を解消しなければならないと感じた。
- 全体的に災害に関する取り組みには関心があるが、防犯に関して意識が低くなっているという結果があった。西東京市からメールが発信されているが、詐欺等も含め防犯に対する認識がまだまだ低く、自分のこととして捉えていない方がたくさんいる。もう少し取り組まなければならないことがこの結果から出ていると感じた。

(副委員長)

- クロス集計を見ると分かりやすい。特に子どもに関する防犯についての意識が下がっているので、性別でどうなのかを見ると、分かりやすいかもしれない。

(委員長)

- 逆に言うと、防犯力が高まって防犯への意識が下がったと言えるかもしれないので、そこはきちんと分析しないとイケない。周知が足りないから逆に下がったとも言えるかもしれないが、5年間の取り組みの中で一定の成果が出たということも言えると思う。慎重に見ながら今後の計画にどう生かしていくか考える必要がある。

(副委員長)

- 大きな事件の後に関心度が上がることもある。

(委員)

- 居場所関係でのニーズが挙げられたが、実際運営していて居場所の必要性があまり感じられない。やっている我々からのメッセージが足りないのか、近所の人も知っているはずなのに来て

くれない現状がある。ニーズはありそうな気がするが、やっている側からすると、それが本当にニーズなのかというところはある。双方からのアプローチが必要なのではないかという気がする。

(副委員長)

- 居場所というのは、「私にとって居心地のいい」という枕詞がつくので、いろいろな所であれば行くということでもなく、居場所づくりには難しさがある。図書館のように、だれでもおいでということではないし、数を増やせばいいというものではない。

(委員)

- 私は社会福祉法人連絡会の役員という立場で参加しており、居場所のことはよく知らないが、社協でアンケートをした結果、社協で何年かやってきたにもかかわらず、まだ「居場所が必要」「居場所に課題がある」という声があり、居場所づくりに取り組んでいる人もジレンマがあると思う。ただ、第三者からすると「行っていいのかな」と敷居の高さも感じる。社会福祉法人連絡会では、児童、障がい・高齢の社会福祉法人が協働して何かできないか模索している。子どもたちのニーズも違うし、引きこもりの青年のニーズも違うし、40代になっても働けないで部屋にいる人たちのニーズも違う。その辺のことを引っ張り出さないと今後の居場所づくりの課題が見えないのではないかと、社会福祉法人連絡会の役割も含めて感じた。

(委員)

- ほっとネットの地域福祉コーディネーターが「連れ出すといいだろう」という人を紹介してくれて、一緒に来てくれて、その後継続して来ていただけるようになった人もいれば、2回ぐらい来て、それから来なくなるという方もいる。もうひと押しできる、協力できるような方がいるといいと感じる。ニーズは個々に違うので、それを含めてだれが来てもいい場所ということで『チャオ!』をやらせてもらっている。それぞれがそれぞれに過ごしやすい場所になってほしいということが願いであり、それが今後の課題だと思っている。

(委員)

- 自由記述に「相談窓口の一本化」「窓口の一体化などシステムの整理が必要」と書いてあるが、気になることがあっても、いろいろな窓口、入り口があって、結局どれがいいのか分からない状況があると思う。社協に近い方でもこういう状況ということは、一般の方はもっと知らないうえに、知ったところでどこに行けばいいのか分からない状況があるように思う。

(副委員長)

- ワンストップもなかなか難しい。

(委員)

- 「居場所とは何か」と言うと、心地よい場所だと思うが、サロンが心地よいと感じる人もいるし、図書館のような場所が心地よいと感じる人もいる。いろいろなタイプの人の居場所という発想があってもいいと思う。その反面、サロンが多い西東京市では、行政目線のグループ分けをしているようなサロンがあって、高齢者から見ると分からないという意見はよく聞く。多世代で集まれるいろいろなタイプがあるといいと思った。
- ワンストップの相談は、市民目線で見ると分かりにくいという反面、相談窓口がたくさんあっても、どこに行っても関係者がつながっていれば結果的にはワンストップになると思っている。そのことが市民に伝わるような発信ができればいいが、残念ながらできていないと感じる。

(委員)

- 居場所についてはどこの市町村でも力を入れて取り組んでいる。成功したところを視察して参考にするのもいいと思う。成功しているところもいきなりうまくいったわけではなく、初めは人が集まらなかったということもあるので、参考になる話を聞きに行ってもいいと思う。
- このアンケートは、社協にかかわりのある方のアンケートなので、地域共生社会の関係の話に

もなるが、社協に全くつながりのない方のことも考えて計画を作っていけたらいいと思う。

- ワンストップとは、相談に行ったその先で全部解決するという意味ではなく、相談先でまず受け止めてもらえることなのかと思う。社会福祉法人の地域公益活動の一つとして「市内のここに相談窓口がある」と発信している市町村もあるので、参考にしてもいいと思う。

(委員)

- 子どもに携わっている立場として、居場所の話やワンストップの話聞いた時に感じたことは、行政が施設・場所をつくることよりも、そこに寄り添ってくれる大人がワンストップの対象であるとか、居心地のいい居場所になることが大切であると思う。温かい思いのある人が続けて関わってくれるような人づくり、「人=場」だと思う。場があってもそこに関わる大人の中に心のない人がいたらワンストップにならないし、居心地のいい場所にもならないので、人づくりということも地域福祉では大事なのではないかと思った。

(委員)

- 居場所に関して言うと、二つの側面があると思う。一つはソフト面で、いらっしゃった人に対する対応や居心地がいい雰囲気と、もう一つはハード面、場所で、地区のどこにあるかである。永く来てもらうには、歩いて来られるくらいの距離が重要で、最初2kmくらい歩いて来ていた人が途中でやめた方もいる。私たちのサロンは小学校の通学路になっており、帰り道にあるので遊びに来る人もいる。ある意味ドライな関係性であったりもして、近くにあるから来るだけという人もいるし、夏休みになると来なくなる。あまり期待し過ぎずに、だけでも自然体で世代間交流ができればいい。休みが終わるとまた遊びに来てくれる。そんな側面もあると思う。

(副委員長)

- これまでの取り組みで対応できていない方々をどうするのか、その中で社協が対応するところはどこかという論点もあると思う。

(事務局)

- アンケート報告書はまだ案であるため、今のご意見を踏まえて精査していきたい。また、その他ご意見のある方は12月22日までにいただきたい。

### (3) 懇談会の実施について

#### ①保健、医療、福祉関係者懇談会の実施概要(案)について(社協独自開催)

- 事務局、コンサルタントより資料1に沿って説明。

【質疑・意見等】

(委員長)

- 今回、3つのワールドカフェとカードワークとフィッシュボウルという取り組みが行われると言われたが、ワールドカフェのメリットについて教えていただきたい。

(コンサルタント)

- ワールドカフェの一般的なやり方のメリットとしては、一度出た意見についていろいろな人と何度も席替えをして話すことで話が広がっていくメリットがあるが、今回はテーマを固定するので、少し埋もれてしまうかなと思う。そこで今回については、様々な分野の方々に参加してもらうため、小グループで何度も席替えをするというやり方でアイスブレイクも兼ねて、まずは気楽にたくさん話していただけるような雰囲気を作ることができればと考えている。

(委員長)

- 今回来たメンバーがある程度関係を作っていくということであれば、ワールドカフェという方法は他職種連携でよくやるパターンで、それでいいと思うが、ターゲットにしている課題を深

めていく時に、ワールドカフェというやり方がベストかどうか気がになった。もう少しメンバーを固定して、しっかりそこについて議論していく、深めていくというやり方もあるだろうと思ったので、ここについては委員の皆さんのご意見をいただき最終的にどういう手法をとるか確認してもいいと思う。

(委員)

- ワールドカフェがアイスブレイクを兼ねているということであるが、対象者がそれぞれの専門職で、自己紹介的なアイスブレイキングがないまま始まってしまうのが、少し大丈夫かなと思った。アイスブレイキングを兼ねているということで、すぐにテーマについて話し合いができるのかなと思う。自己紹介的なことをしながら、テーマを深ぼる作業が同時進行ということが可能なのか？

(委員)

- 全員で20名程度ということで、地域包括支援センターに関しては、センターの中で選抜して参加するのか、または各包括に依頼が来るのか、それとも、地域支援係からセンター全体に依頼が来て、その中で選抜をして参加するというイメージか。

(事務局)

- その手続きについては、市の高齢者支援課にも確認をしながら進めたいと考えている。地域包括支援センターから1人ずつという人数的にも増えてしまうので、例えば1圏域から1人という形で出してもらおうと思っていた。どなたに参加いただくか、というところは高齢者支援課とも相談したい。

(委員)

- これだけの関係者が集まって一つのテーマについて話し合いをする機会は少ないので、包括としても地域の意見をしっかりと受けとめていただきたいと思った。

(委員)

- プログラム案の事前アンケートはまだできていないのか。専門職が2時間半も時間を取ってくれることはありがたいことだ。懇談会の目的である課題の抽出とアイデア及び住民に協力してほしいことについて事前に考えを持った上で参加した方がいいと思った。まずはアンケートの内容を知りたい。
- 先ほどのアンケートの説明とこの福祉関係者の懇談会のところで、「市民」と「住民」が混在している。その使い分けの意味を教えてください。

(事務局)

- 事前アンケートについては、後程皆さんからご意見をいただきたいと思っていた。資料4になるが、どんな対象者がいるか、どんなニーズがあるか、そして潜在的福祉ニーズを発見するためにできることとして住民に期待すること、住民が社協といっしょにできること、社協に期待することを記入いただくようなアンケートを考えている。潜在的ニーズを皆さんから挙げていただくことをベースに考えている。
- 「市民」と「住民」の使い分けができていないことについては、この委員会の中でも、ご意見をいただいて、統一していきたいと思う。市民というと、会社やいろいろな団体も入ってくるし、あるいはそこに住んでいなくても西東京市で活動している方も市民という枠に入ってくると思う。住民は、そこに住んでいる方と限定的なとらえ方になると思う。

(委員)

- ワールドカフェ方式やカードワーク、フィッシュボウルは初めて聞いた。いろいろな研修会でグループワークをやっているが、このやり方は最近広くやられているやり方なのか。会社などではやっているかもしれないが、地域福祉の計画を作る過程でこういう方式が使われているのか教えていただきたい。

(コンサルタント)

- ワールドカフェについては 2009~2010 年くらいから徐々に日本に浸透してきて、自治体でも、特に地域福祉に関する協議の場を取り入れることはここ 2、3 年で多くなっている。フィッシュボールというやり方についてはどちらかという企業で行われることが多い印象である。
- 地域福祉のワークショップというと、市と社協合同で実施する懇談会のように、一般市民の方が対象となることが多い。フィッシュボールはあまり市民を対象とする時には馴染みがないが、専門職の方に来ていただけるので、フィッシュボールの方が自由に話し合えることで意見を吸い上げられるかと思う。

(委員)

- ワールドカフェは 20 分くらいで回していくのか。

(コンサルタント)

- 全体の時間の配分については検討中だが、一般的には 20~30 分くらいで一単位をやることになる。今回も 15~20 分くらいで一単位を回していく感じた。

(委員)

- 同じメンバーで話が盛り上がったところで、変わってしまって、振り出しに戻るのではないかという懸念がある。話し合いをして煮詰めていくという感じのものではないのか。

(コンサルタント)

- 最初に委員長にご指摘いただいた通り、掘り下げることに向いている訳ではないので、ここでの議論と事務局との話し合いでどうするか検討することになる。

(委員)

- 同じメンバーでじっくり話し合った方がいいのではないかと思う。

(副委員長)

- どちらかという発散型、とにかく意見を出していこうということと、どんどん話が変わっていくことで頭をかき混ぜるようなワークなので、じっくり深めるという議論のものではない。ここでそれが向いているかどうかは事務局で検討してもらえばいい。時間配分については、一つ目は 15 分を 4 回で 60 分、その次が 30 分で、最後のフィッシュボールが 60 分で、あいさつなども入れないで 150 分使うことになるので、この 3 つを果たしてできるかという疑問を持った。

(委員)

- 最後の検討・まとめの中で、こういったネットワーク・連携が必要か、住民に協力してもらいたいこと、社会福祉協議会に支援してもらいたいこと、その他必要なことに、例えば、社会福祉法人の公益活動に絡めて高齢者施設、障がい者施設、保育園に期待することは何ですかということなどをぜひ入れていただければと思う。この内容は私たちも知りたいので、社会福祉法人連絡会もしっかり理解して力を出せるようにしたいと思っている。
- ここに集まるのは専門家の人たちである。事前アンケートも記入されているので、一番のワールドカフェ方式の、問題を共有する、出し合って共有するところをもう少しコンパクトにして最後のところでアイデアをひねり出すという方法がいいのではないかと思った。

(副委員長)

- 4 つのテーマになっているが、どういうテーマを想定されているか、教えてほしい。例えば、居場所とかになるか。

(事務局)

- そうではあるが、事前のアンケートの結果からテーマを絞り込んでいく予定だ。

(副委員長)

- そこは分かるが、イメージができないので。例えばどんなテーマが挙がってくると想定しているか。

(事務局)

- 生活困窮者に対しての支援なども含まれる。

(副委員長)

- 対象者の場合もあるし、活動の場、解決策などになるかと思う。  
これは委員が見に行くことができるのか。

(事務局)

- ぜひ来ていただきたい。

(副委員長)

- 時間の取れる方は日時が決まっているので、ぜひ来ていただきたい。

## ②地区懇談会 実施概要について(市・社協合同開催)

- 事務局、コンサルタントより資料1に沿って説明

【質疑・検討事項等】

(委員長)

- 今回住民を中心にするものなので、ワールドカフェで問題ないと思う。1回目のオリエンテーションの段階の1番目で「困りごとの洗い出しを行う」をワールドカフェで行い、次に「地域における課題の抽出」ということで、カードワークを行うことになるが、「困りごとの洗い出し」と「地域における課題の抽出」が繋がらないので、「困りごと」と「課題」とどう違うのか、知りたい。また、ワールドカフェは机の上のシートに、好きなことをどんどん書き出して行って、そこで話したものを書き出していくというのが一般的だと思うが、今回机がないためそれができないので、どう想定しているのか知りたい。
- 「学生に参加してもらいたい」という依頼を受けているが、今回の流れだと学生に役割があるのだろうかと感じた。当初の依頼の内容が「学生に発表してもらいたい」という話だったが、まとめを発表するとしても内容が分かっていないので難しいと思う。また、そもそも学生に発表してもらいたいものなのかどうか。学生が入った場合、学生の視点をどこに入れられるのが気になった。

(コンサルタント)

- 「困りごと」と「課題」について、資料の作成を始めており、そちらでは「困りごとをまとめると変えている。ワールドカフェを椅子だけでできるのかということだが、他の自治体でもやっているが、机があり、模造紙に書かなければならないという雰囲気は逆に硬くなってしまいがちなので、あえて机なしで距離感を近くして、まずは話を弾ませてもらいたいという意図がある。メモが完全には残らないので、個人でメモのページに簡単にメモしてもらって、それと記憶をもとに簡単に話してもらおうかたちになる。
- 学生の参加については、前回の打ち合わせでも「課題を出すのは難しいかもしれない」という話は出ていた。どちらかというと、解決アイデアを考えていく時には柔軟なアイデアが出てくるのではないかという期待があった。

(委員)

- 学生がこのような会議を経ない状況でそこに参加しても解決策のところで意見が出せるのかなと思った。資料1の13ページに地方出身で一人暮らしをしているという話があったが、



今回選出されたメンバーでそんな人がいたかどうか。実家暮らしや市民だけ住民ではないという人がいるので、期待に添えるか気になる。

(委員長)

- ・今回参加を予定している学生については、この委員会の伊東委員のほかに西東京市社協で2名の学生を実習生としてご指導いただいたので、その2名についてはお願いしている。もう一人については、立川市社協に実習に行っている学生に了承いただいている。しかし、ただいるだけだと意味がない。本来であれば、それぞれの圏域に3回ずつ入るのがベストではあるが、それは難しい。学生のかかわり方は工夫した方がいいと思う。

(副委員長)

- ・西東京市に住んでいなくても、西東京市にある大学に通っている中で、学生として自分たちの困りごとを出してもらうことによって、この懇談会に来られる方々とは全く違う切り口での地域課題を出してもらえるのではないかなと思う。解決の方法よりも、課題、困りごとを出してもらうことにこそ、若い人に参加してもらう意味があると思う。平日なので、勤労者は難しい。偏ることは前提のうえで、勤労者からどう声を聞くかを考えてもいいと思う。

(委員)

- ・公募の広報のスケジュールはどうなっているのか。日にちがない。

(事務局)

- ・広報は市で行っており、12月15日の市報に載ると聞いている。

#### (4)「我が事・丸ごと地域共生社会の実現」における社会福祉協議会に期待すること

- ・事務局より資料4に沿って説明。

【質疑・意見等】

(副委員長)

- ・新たな課題なども含めてコメントいただきたい。

(委員)

- ・潜在的ニーズ、後期高齢者の地域での活動、福祉ニーズというと、定年後地域に戻ってきた人たちで地域とのつながりがない人たち、その人たちを含めて「我が事・丸ごと」にしていくことが大切だと思った。

(副委員長)

- ・再雇用が終了し、65歳以上の人たち、団塊の世代が地域活動に出てきているので、どう関わってもらえるのかまさにこれからの課題である。
- ・「浮きこぼれ」ということで最近相談を受けた。「落ちこぼれ」の反対で、頭が良すぎてついていけない、学校ではケアできない子たちがいる、不登校になるということである。昔は飛び級でどんどん上にいけたが、今はそれができない。
- ・働きに来ている外国人で日本語ができない、英語もできない、母国語だけしか話せないだけという方に対して、その子どもたちに対するケアや地域で暮らしていくための支援も必要である。ゴミの出し方から教えないといけない。

(委員)

- ・元気なお年寄りが多く、何かあると地域包括支援センターに相談すればいいと頭では分かっているが、自分がどのような状況になったら利用すればよいか分からず、実際に使いたいと思った時に自分から声を出しにくい人がいる。段階分けしながら課題を具体的に掘り下げていければいい。

(委員)

- セクシャルマイノリティについて、低学年では、自分の心と体の性が違うことに「変だ」と気づき始めるが、学年が上がっていくと、「心と体で性差がある」ことに気づく。それが悪いことだと思ってしまって、引きこもりや不登校になるきっかけにもなっている。学童保育などでは都への報告上、男子、女子の人数を記録している。

(委員)

- 食生活について、お金さえ出せば手に入るようなお惣菜がたくさんあるが、一人だから何でもいいということで、しっかり食べている人が少ない気がする。たくさん買って、その日に食べればいいが、何日も冷蔵庫に置いていても平気で食べてしまう高齢者がいるのが気になった。貧困による子どもの食生活だけではなく高齢者も食生活に問題がある。

(委員)

- 高齢者が車を卒業して、次に自転車を卒業しなければならなくなった時に、行きたいところに行けなくなり、結果的に狭い社会の中で生きなければならない人たちが多い。

(委員)

- 若い人、特に学生の中で、自分が生活に困っているかどうか分からない人がいる。テレビのニュースで貧困についてやっていても、自分がそれに当たるか分からない。その程度を知らないで、自分が困っていても困っていないと思っている状態の人も支援の対象にできたらと思う。

(委員)

- 障害者差別解消法ができて、比較的的制度も整備されて子どもたちも大人も行く場所があり、仕事をする場所ができつつある。先日、グループホームで生活する知的障がいの方たちに対し、通所先の作業所に行く途中で小学校の子どもたちがはやし立ててトラブルになった。子ども達を怒った時に子どもが倒れて怪我をしてしまった。そのことで職員が通勤のルートを変えたりして工夫しているそうだが、共生社会の中で当たり前にくらしていこうとする傾向はみられるが、まだまだだと感じている。

(委員)

- 今の話を聞いていて、「そうだなあ」と思う。教育機関と福祉機関が縦割りになっていると思う。子どものうちに、障がいのある子もいない子もいっしょに過ごしていたら、それが当たり前だと自然に思えてくるが、学校は閉鎖的な一面がある。障がいのある子と一緒に生活するという経験値があって、いろいろな子がいて当たり前だと、知らず知らず身についていく。小さいうちからの経験値を増やすことが共生社会につながるのではないかと聞いていて思う。

(委員)

- 地域包括支援センターで小学校・中学校に向けて認知症サポーター養成講座を順次開いている。大人もよく聞いてくれるが、子どもの場合、目と聞く姿勢が全然違う。私たちも取り組んでいて達成感がすごくあるので、福祉教育を受けられる機会を増やすことは大切だと考えている。

(副委員長)

- 福祉教育というと、「車椅子や白杖等について考える」という限定的な取り組みだったが、次の展開にどんどん進化している。

(委員)

- ここにいる人々は地域をよくしたいという人ばかりだと思うが、地域というのはその反対で、排除しようとする面も持っている。セクシャルマイノリティの話も障がい者の話もそうだが、地域にはそういう排除するという面があるということを前提に、地域共生社会を考えていけないといけないと思う。東社協のワーキングでも、福祉教育、子どもの教育の話がよく出て

きて、人材を育てていくというのは、大人になってからではなく、子どものうちからそういう話をするというのがすごく大切だという話は出ていた。どんなに制度を作ってもこぼれ落ちる人たちは絶対いて公的な制度では救えないし、どんなに公的な機関が制度を増やしても無理というところは、社協がその隙間を埋めていくことができると思う。今話に出てきた対象者については今ある制度では対応できないと思う。また、セルフネグレクトは、周りから見たらどう見ても困っているはずなのに、本人は「困っていない。そういうサービスを受けたくない」と言う。そういう人たちを救い上げていくのが、地域共生社会の目指すところなのかなと思う。

(委員)

- 居場所をつくって、居場所がいっぱいできて、人それぞれがいいと思うことをやって、そこにそれぞれ選んで来きてもらう。そして、つながりがどんどん増えていく。それはとてもいいことだし、問題もあるけれどもそれは大切なことだと分かりかけている。居場所を運営している者同士の横のつながりを作ることを、社協に期待したい。調査のニーズをもとに、ことここは連携できるかもしれないというヒントづくりをすぐに判断し、いろいろな社会資源を結び付けていって、結び付けたところが違うかもしれないけど、実はつながっていたりなど、いろいろな調整役を発揮できる場所だと期待したい。横のつながりを強化していくことを社協に期待したい。

(副委員長)

- 「住民として社協に期待すること」のシートについてだが、「市民」と「住民」の違いからすると、ここは「市民として」にした方がいいと思う。なぜなら、これでは「住んでいる人」だけになってしまう。全国的にボランティアセンターの動きとして、「多者協働」でいろいろな人を巻き込んでいくという話が出ている。社協だけではなくて、他のセクターの方々ともどう連携するかという時には、企業市民、生協などの組織との連携・協働を図っていくことが趨勢になっているので、地域に住んでいる人という意味の「住民」ではなくて、「市民」と書き換えた方が、より連携・協働のイメージが膨らむという気がする。

(委員)

- 11月から、埼玉県の昼間と夜間が一緒になっている高校の教員になったが、小学校や中学校で何らかの事情で引きこもりがあって十分に教育を受けていない学生が少なからずいて、彼らについて感じることは、社会的なルールやマナーが身につけていない、覇気がないことである。名前を呼んでも返事が聞こえない。目を合わせる程度。そんな子がいて、学力の問題もさることながら、そういうことも含めた教育が必要だと感じている。西東京市にも高校はあると思うが、この学生に似たようなことがあるかもしれない。スクールソーシャルワーカーを導入したり、カウンセラーが導入され、学校に来させることに一丸となって、いろいろなことをやっているが、それでも落ちこぼれる人は出てきてしまう。もしそういうことが潜在的にあるとすれば、どの程度我々が協力できるのだろうか。ここに潜在的なニーズが有りうるかもしれないと思った。

(副委員長)

- ニート、引きこもり、不登校など、いろいろ複層化しているので、テーマとしてむずかしいところもあり、ニーズとしては大きいと思う。

(事務局)

- 本日出していただいたものについてはこちらでまとめる。この他にご意見等あればぜひ22日までに、出していただきたい。

### 3. 次回以降の日程、会場

- 第4回策定委員会： 日時 平成30年2月26日(月) 19時～21時  
会場 田無総合福祉センター2F 視聴覚室